徒然草試論（一）

——「徒然草の思想を論ず」を読んで——

難　波　三　郎

岡山理科大学　教養部

（昭和54年9月21日 受理）

はじめに

『日本文学研究資料叢書・方丈記徒然草』所収の諸論文中に，ひときわ異色のものが一篇みられる。それは高名な英文学者斎藤勇（たけし）博士の「徒然草の思想を論ず」と題する論文[1]で，博士のお若い時のものだけに，徒然草及び作者兼好を徹底的にやっつけておられるもの。ここでは主に，斎藤博士によるそうした徒然草・兼好批判の妥当性如何を問題の中心として，論述してみたい。

I

博士は，先ず徒然草の普及とその原因について説明し，続いてこの古典に対する諸家の讃辞に関して少々論じた後，次の如く述べる。

> 私は誤解を招かないやうに，結論をここに掲げる。「徒然草」は熱涙なく熱血なく，唯程よさ，御上品などを心掛くべきやうに教へる，主義のない，俗悪な道学書であると私は断言して憚らない。これを説明する前に，ことはって置かなければならないのは，今までの「徒然草」悪評者と私との論点の異なることである。多くの人は，例へば「駿台雑話」に於ける室鳩巣の如く（但し鳩巣には，何でも老荘の徒や仏者が言ったものなら皆だめだとけなすやうな，儒者の偏見もある），兼好の言葉と行ひと一致せず，又言ふ所に矛盾のあることを批難する。併し私はその無節操と矛盾との来る所以を明らかにしたいと思ふのである。
>
> 第一に，「徒然草」には熱涙熱血が殆んど全くない。先ず巻頭の序文を読め。[2]

そしてこの後に徒然草の序段の「つれづれなるままに，日ぐらし，硯にむかひて心にう

つりゆくよしなしごとを，そこはかとなく書きつくれば，怪しうこそ物狂ほしけれ」[3]　という文を掲げて，博士の仰有るに，「彼れは退屈で困ったので，ひまつぶしに何でもない事をあてどもなく書き記したのである。兼好は止むに止まれぬ心から筆を執ったのではない。せう事なしに文字を弄したのである。……」[4]　と。さらに「バイロンは随分不道徳な事をしたり書いたりしたが，彼れは或る時には命懸けで事に当った。バイロンの生活は兼好の生活よりも，人に迷惑を与へたかも知れない。しかし前者は熱と力とを有ってゐた。私はどちらかと言へばバイロンを執る。バイロンにも劣るとすれば，パスカルなどとはとても較べものにならぬ。……すべての偉大な人物は熱誠の人である。私はこの不誠実な似而非法師をつまらない男と思ふ。」[5]　とまで似有る。何と烈しいお言葉！……的外れの単なる外在的批判でなければよいが。兼好を「誠意」も「熱心」もない「つまらない男」と博士が論斥されるここでの論拠は徒然草の序段。そこで，序段の解釈が問題となる。斎藤博士は，序段を文字どおりに，作者兼好の本音として解釈され，しかも徒然草全篇の執筆動機・対象・手法などが，この序段に表わされているものと解されているが，果して，それが正しい理解といえるかどうか。

この序段に関しては，古来，いろいろな説があるけれども，ここでは，現代の代表的ともいえる二，三の説を簡略に記し，その後に私見を述べてみたい。

「つれづれ草のつれづれ」[6]　と題する論考において，野村宗朔氏は，「つれづれ草の序段は，つれづれ草全般に亘っての，兼好法師の述作態度を表してゐると認むべきことは，更めていふまでもなからう。然るに，つれづれ草の汗牛充棟の新古諸註釈書のうち，私の見た限りは悉く，その『つれづれなるままに』のつれづれといふ語を，退屈・無聊・徒然・所在なさなどの意に解して，つれづれ草を，兼好法師が隠遁生活の退屈しのぎに書いたもののやうに云ってゐるやうに見え，そしてそれが定説となってゐるらしいが，私は従ふことができない。」[7]　と述べ，「つれづれなるままにつれづれ草を書いて怪しうこそ物狂ほしいと云った兼好法師の心境」[8]　を説明して，氏は次のように言う。

> つれづれ草序段の全般を考へると，つれづれなるままにと云ったのは俗世を出離して庵室に居る兼好法師の心に次から次と映じて過ぎゆく自然人事に対して鋭敏に動いた感情の興奮を，出離脱俗の身の之を処置すべき途のない余義なくされたもだ，之をつれづれと云ったのである。おぼしき事いはぬは腹ふくるるわざと云ったのも彼のつれづれの主要なる一である。さてこれを書きつけるとつれづれ即ちおぼしき事いはぬ腹のふくれが爆発して心の平静は失はれ気持が狂気じみてくるといふのである。書きつけると狂気めいた気持になるといふ程強烈な興奮した心情であって，無聊閑散退屈徒然の余りに書かれたつれづれ草ではない。
>
> このことはつれづれ草の取扱ってゐる内容についても，その文勢についても，全篇随処に認められる。兼好法師が眼に映じた自然を人事を，細大となく，理想と趣味と

を以て批判し論評し主張して，縦横に筆を揮ってゐるものは，正に黙止しては，坐ても立っても居られないじれったさ，即ちこの意味に於けるつれづれの心境から発してゐる。[9]

これに対して，橘純一氏は「先輩野村学兄がつれづれ草序段の『つれづれなるまま……』について，犀利な御考察をお寄せ下さったことを深く感謝する。」[10] と述べた後，反論に移り，「……私は此の序段の『つれづれなる』の意は，普通の意に解して，『閑散無聊なので』と訳しておいて一向さしつかへないと思ってゐる。」[11] と語って，その理由を，「書物の序跋に於て，作者自身が淋離たる慷慨を吐露したり，万丈の気焔をあげるなどといふことは，平安朝以降の貴族的教養を受けた人に於てはとうてい考え得られぬことである。」[12] とし，さらに，「本文中ではいかに気焔をあげようとも，序跋即ち読者に対する辞令としては，打って変って謙遜の態度をとるといふのが，大体に於て古今を通じての定型である。」[13] という。つづいて，橘氏は，そうした実例として，枕草子の跋・土佐日記跋・蜻蛉日記序・和泉式部集五を挙げて，次の如く言明している。

とにかく，日記随筆の序は，読者に対する挨拶たる性質を持つのであるから，決して勢ひこんだ物の言ひ方をせぬのが常である。以上の如き，自照文学の序文に対する一般的理会を以て徒然草の序段を見れば，「つれづれなるままに……」といひ「あやしうこそ物狂ほしけれ」とあるのが，通常の序文なみの物言ひ——謙譲なひかえめな辞令であると解する事は頗る当然であると思ふ。[14]

では次に，西尾実博士の学風を慕う安良岡康作氏の見解や如何に。氏はその著『徒然草全注釈上巻』の中で，序段の解説をしていわく，「この段の表現自体は，素直に，自己の，筆を執って書きつける生活を省みた時の感想であって，世に公表するための序文として書いたという意図は認めがたいように思われる。これは，何よりも，ここの文体が，自然に流露して，しかも，自己の心理を見つめている，おちついた調子につらぬかれているのによるのである。したがって，この段は，著者兼好の，とある一日の執筆生活の感想として考えてよいのであろう。……」[15] と。これに対する筆者の意見は後に述べることにして，もう一説だけ紹介しておこう。

それは，徒然草についての通説に対して批判的な考えの持主である井手恒雄氏の説で，「兼好と寂静主義」という論文において，序段にふれて，次の如し。

兼好は「つれづれ」の状態にあって徒然草を書いた，などといわれるのは，序段の誤読による。序段の「つれづれなるままに日ぐらしすずりにむかひて云々」は，あまりに有名であるわりには，その真意が正しく理解されていない。普通に，「徒然草は，その序段に述べているように，『つれづれ』という，他の物事に心がわずらわされぬ

自由閑静の境地にあった作者が，心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつづった随筆の書である」などといわれるが，ほんとうのところは，兼好は，当時としてはその内容から見ていろいろとはばかるところがあって，その書くものを「つれづれ」の所産と称したのである。「これは，わたしが『つれづれ』のなぐさめに『よしなしごと』を書きとめたものです。お気にさわることがあっても，とがめないでください」と，予防線を張った上で徒然草を著したのである。われわれは兼好のことばのあやを理解しなければならない。[16]

さて，先程の，安良岡康作氏の見解に対する筆者の考えるところを述べよう。上述の如く，氏は序段を「世に公表するための序文として書いたという意図は認めがたいように思われる」といっているが，その根拠たるや，主観的なものであって，俄に首肯くわけにはいかない。

それでは，序段についての筆者の意見や如何に，と問われると，現段階では次のように申し述べるほかない。

橘純一氏も指摘している如く，徒然草の序段は，王朝の日記・随筆の序の定型に従って，作者が読者に初お目見得の挨拶として，わざと謙遜の態度をとって，「退屈まぎらしに書いたつまらないものです」という意味のことをいっている序文である，と第一に考える。このことは，徒然草にみられる如く，王朝文化の伝統をも大いに重んじる兼好の美意識からもいえることであり，そして何より，三木紀人氏も言及してる様に，[17] 徒然草が枕草子をモデルにして書かれたものであることを想起すれば，頷けることだ。

このように，徒然草序段は第一に，読者に対する「謙退の辞令」[18] であり，第二に，井手恒雄氏の説の如く「お気にさわることがあっても，とがめないでください」という「予防線を張って」もいるのではなかろうか。このことは，徒然草全篇にわたって感じさせる兼好の思考の深重なることと神経のこまやかな注意深い性格からもいえよう。

筆者はさらに，徒然草序段の背後に，作者兼好の徒然草全体に対する並並ならぬ熱意と自信の程とを感じもする。これは，徒然草全篇の随所にみられる兼好の驚くべき洞察力からもいえるであろう。すなわち，そうした洞察力の持ち主であればこそ，こうした表現の序段を書きもするのではないだろうか。

とにかく，以上の如き三重の意味を，徒然草の序段は内包しているのだ，と筆者には思える。

いずれにしても，徒然草序段は，「兼好の本心に照らせば『虚』である」[19] こと，もはや論を俟たない。この事を見抜かずして，序段を文字どおりに，作者兼好の本音として，解釈された斎藤勇博士。博士の序段解釈は誤っていたといえよう。従って，博士が，そうした序段解釈に基づいて，兼好のことを「誠意」もなければ「熱心」もない「つまらない男」と批判されたのは，的外れであって，全然当っていない，ということになる。

とここまで述べてきて，念頭に浮んだことがある。それは，文学研究の難しさということ。つまり，文学研究者が，或る文学作品について論じようとする場合には，その文学作品が書かれた時代において，その作品を〈眼光紙背に徹〉し，〈行間を読む〉というところまで読めていなければ，その論考はとんでもない独断に陥ってしまう，という事だ。

II

斎藤勇博士の兼好批判はつづく。

> 第二に兼好は恬淡を最善の徳ででもあるかの如く思った。……
>
> 彼れが出家の動機は奈辺に存するか。之れを明らかにすべき史料は乏しい。けれども大方失恋の結果，東国に放浪し，更に後宇多院の崩御を聞いて剃髪したものであらう。坊主頭になったものの，彼れは決して厭離穢土，欣求浄土の高僧ではなかったらしい。死ぬまで生臭であったらう。彼れが出家遁世したのは，世間の事が面倒でうるさいと思ったからであるとも言へる……。私は彼れの遁世には必ず倦怠の情を伴ってゐたと思ふ。兼好は人世の義務を遂行するのが煩く感じた為めに，義務の治外法権裡にかくれやうとした。そして彼れはそれを出家遁世といふ美名に於いて発見した。即ち彼れは人生の悪戦苦闘を忌避して，花見遊山などの中に一生を茶かしてしまはうとしたのである。[20]

実際何故に，兼好は出家し，遁世したのか。これに答えるべき確証に基づく定説は未だ無いようである。大体において，徒然草に関する研究では，伝記考証の方面が最も進んでいると言われていながら，兼好の生涯は究明されていない部分が意外と多いのだ。とは言え，この問題に関する最近の学説と徒然草全篇を読んでの私見とを記しておこう。

当時の宮廷内部では，大覚寺統と持明院統という二派に分かれての対立がみられ，堀川具守家は前者に属し，さらに同派の中でも後二条天皇派であった。具守が大納言であったとき，その女基子が後宇多天皇の寵愛を受けて第一皇子邦治親王（後の後二条天皇）を生んだのだ。[21]

外孫皇子誕生後，具守は西園寺家と対抗するだけの関東との連携の道を求めることが必要であったはずだ。その必要を充たす点において，具守の弟基俊が，後宇多院との恋のトラブルに関連して正応に東下りしていたことは，皮肉にも有効な働きをすることになったようだ。青年兼好の関東からの抜擢は，具守のそうした政治的活動の一つの現われであったろう。こうして具守によって，兼好が迎えられたのが，邦治親王立坊の時だとすれば，これをめぐる京都宮廷社会の思惑には複雑なものがあったらしく，特に複雑な対関東感情

乃至関東観をもっていた筈の後宇多院は，兼好を拒絶したのではなかろうか。成年になったばかりの兼好が，漸く東宮坊蔵人として宮廷社会に新生活を築こうとするその第一歩において，遭遇したものがこれである。彼は何を感じたか。当時の兼好の年齢を考え，その対処力を思うとき，一個の若者兼好には如何ともしようのない，その出自に向けられたおとなの政治社会の猜疑に対し，その不合理さ不当さに心の内で憤慨しながらも，次第に厭世的になっていったであろうことは，想像に難くない。[22] 何分，彼は生来，感受性が人一倍鋭く，傷付き易い一面もあったのだから。そうした兼好がついに宮廷社会を後にし，隠棲生活に入ったとしても，これまた不思議ではない。

こうして京都のほとりで隠棲生活をすること数年，兼好はやがて，その生活をも捨てて，漂泊の旅に出る。そうした旅の日々，若き兼好の胸に去来したものは何ぞ……。「世をのがれて木曽路といふところをすぎしに，おもひたつきそのあさぬのあさくのみそめてやむべき袖の色かは」と『兼好家集』にあるのは，そのような旅空の或る時の思いであったろう。この歌のあと，幾程かの月日と思念の末に，彼が辿り着いたのは武蔵の国のかねさはの寺，稱名寺の明忍房釵阿の膝下であったようだ。つまり，遁世の旅の果てに，本格的な出家を志してきた兼好を，明忍が迎えたのであろう。[23]

稱名寺は当時，実時以来の文庫と学僧を擁し，やがて「金沢学校」の開講をみようとする前夜の時期に当っていたという。こうした時，なまの若い血気の青年が，絶望のあと漂泊の旅の末に，この稱名寺に辿り着き，明忍の指導の下，己を生かす学問を必死になってしたのだ。徒然草にみえる兼好の学識こそは，この時期にその基礎ができたものなのであろう。そのことはともかく，明忍の人物器量が，若者兼好の為に，学問の種類をえらび，中国古典を中心とする対現実の学問をさせたのであろうか。兼好は再起の力を得て，徳治二年（1307年）に明忍の書状を帯し，上洛，否，帰洛したのだ。そこには，兄の倉栖兼雄も老母もいた。さらに，従一位大納言堀川具守が，既に即位した往年の皇太子邦治すなわち後二条天皇を擁して，淳和奨学両院の別当として居た。では問題の後宇多院はどうしていたか。愛妃遊義門院を喪って今は「大覚寺のみに籠りおはします」（『増鏡』）のであった。兼好，この環境を「花洛住み佳し」と感じ，かの明忍に「……また花洛住み佳きは帝王隆盛の故也」と書き送っている。この帝王とは後二条帝のことであり，この帝の隆盛を謳歌している青年兼好。久方振りに明るい気持にもなれたのであろう。将来への希望も持てるようになってもいたであろう。[24]

その京の都の青空に，突如，黒雲現われいで，瞬く間に，一面真っ暗に……。世はまことに無常。後二条帝が崩御したのである。時に，徳治三年（1308年）八月のこと。先の「……帝王隆盛の故也」と明忍に書き送った時から，一年とは経っていないのだ。若き兼好の胸中や如何に……。

後二条帝崩御によって，宮廷社会における兼好の周囲の現実も大きく変貌したことであろう。いつの世にも，いかなる社会・集団にも必ずいるものだが，手のうら返す浅ましい

立身出世主義エゴイストどもを，兼好はこの時まのあたりに多く見たことであろう。そして，二重の意味で，ひとのあてにならないことを思い知ったことであろう。さらに，人の醜さと愚かさ，卑屈さと驕慢さを知らされ，人の世のくつがえり易さ・不常の理を痛く実感せざるをえなかったでもあろう。正に，〈諸行無常〉を見てしまった青年兼好……。

この兼好に，当時，出家以外に生きる道が残されていたであろうか。

かくして，後二条天皇崩御から数年の内（兼好20代後半）の或る日，兼好はついに出家を決意し，叡山の最も奥，横川に身を寄せ，厳しく修行。この時の彼の真摯な信仰姿勢は，『家集』にある次の如き歌からも窺うことができる。[25]

「横河にすみ侍りしころ，霊山院にて生身供の式をかき侍りしおくにかきつく，うかぶべきたよりとをなれ水くきのあととふ人もなき世なりとも」（第六三歌）「もちたるあふぎをほとけにたてまつるとてかきつけし，つねにすむみやまの月にたとふなるあふぎの風にくもやはるらん」（第六四歌）の二首。さらに，「堂のはしらに永仁五年公世の二位の五部大乗経供養にのぼりて筆ひきけるよしなどかきて，ひくことをあはれとしらばなき世までかたみにしたへ松の秋風」（第六五歌）「とかきつけられたるがきりにくちのこりてかすかに見ゆるもあはれにてかたはらに，松風をたえぬかたみときくからにむかしのことのねこそなかるれ」（第六六歌）。

青年兼好再三不遇なり。正和三年（1314年），新造の日枝社頭で六波羅武士と「山」の僧徒とが流血の惨事を起こしてしまった。六波羅探題の執事倉栖兼雄の弟ということだけで，忽ち兼好は叡山で最も奥の横川での一心不乱な仏道修行すら周囲から許されなくなったのだ。この時，彼は何を見たか……。憂き世の外だとばかり思っていた「比叡の浄域」までも，決して浮き世の外の別世界ではない「山」の現実を，専門僧職の表裏の実際を，確かと見たのである。[26] 兼好，日夜，「人生如何に生くべきか」を考えに考えたことであろう。

その結果，男兼好，自由にして主体的な人間存在の本来の生を真に生きるべく，決然と「山」を遁世・「下山」して，隠遁者への道を選んだのであった。

徒然草の第一段に，

> 法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも，げにさることぞかし。いきほひまうに，ののしりたるにつけて，いみじとは見えず。増賀ひじりのいひけんやうに，名聞ぐるしく，仏の御をしへに違ふらんとぞおぼゆる。ひたふるの世すて人は，なかなかあらまほしきかたもありなん。[27]

とあるのは，この時の思いが込められているものとみられる。

以上において述べてきたことから既に明らかなように，兼好は，斎藤博士の御高説の如

く「花見遊山などの中に一生を茶かしてしまはう」として，出家遁世し隠遁したのではなかったのだ。この事は，徒然草の例えば第一三七段における，

…若きにもよらず，強きにもよらず，思ひかけぬは死期なり。今日まで逃れ来にけるは，ありがたき不思儀なり。暫しも世をのどかには思ひなんや。継子立といふものを双六の石にて作りて，立て並べたるほどは，取られん事いづれの石とも知らねども，数へ当てて一つを取りぬれば，その外は逃れぬと見れど，またまた数ふれば，かれこれまぬき行くほどに，いづれも逃れざるに似たり。兵の軍に出づるは，死に近きことを知りて，家をも忘れ，身をも忘る。世を背ける草の庵には，閑に水石をもてあそびて，これを余所に聞くと思へるは，いとはかなし。しづかなる山の奥，無常のかたき競ひ来らざらんや。その死にのぞめる事，軍の陣に進めるに同じ。[28]

のごとき文章表現の中にも，読みとれることであるし，また第四九段の，

老来りて，始めて道を行ぜんと待つことなかれ。古き墳，多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて，忽にこの世を去らんとする時にこそ，はじめて過ぎぬるかたの誤れる事は知らるなれ。誤りといふは，他の事にあらず，速にすべき事を緩くし，緩くすべきことを急ぎて，過ぎにしことの悔しきなり。その時悔ゆとも，かひあらんや。

人はただ，無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて，束の間も忘るまじきなり。さらば，などか，この世の濁りも薄く，仏道を勤むる心もまめやかならざらん。[29]

というような迫力に富んだ文章においても窺うことができよう。こうした真剣な姿勢で人生に立ち向っていたからこそ，兼好は第一一一段に

「囲碁・双六好みてあかしくらす人は，四重・五逆にもまされる悪事とぞ思ふ」と，或ひじりの申しし事，耳に止まりて，いみじく覚え侍る。[30]

と書くことができたのである。

なお，この第一一一段に関して，たとえば沼波武夫氏はその著『徒然草講話』の中で，

囲碁双六に遊んで時を費すということは，吾人に天が与えている時間，吾人を向上せしむべくさずかっている時間を浪費してしまうことである。大罪である。かかるたわむれして，澄ますべき心をわざと濁らせ，明らかならしむべき心をわざと曇らせるのは，この尊き心をみずからつとめて堕せしめていることである。大罪である。[31]

と喝破しており，また，かの橘純一著『評註徒然草新講』には，「本段は，……ありふれ

た，然しゆるし難い大悪徳を啊破したのである。……宿業の催しによって犯す四重五逆の罪人よりも，放心から馴致されるグウタラな生活をにくむ。形よりは精神……というのが，この聖人の真意であり，兼好の感銘した点であろう。味の深い言葉である。」[32] との卓見が示されている。

ところで，今日，われわれの周囲にも，極く少数ではあるが，貴重な時間・場所に於て，囲碁などに耽ったり，人の迷惑も考えず長々と無益の事をしゃべったりしている連中が居りはしないか。居なければ幸いである。だが，もし仮に居たならばどう考えるか。……その事自体は取るに足りない瑣事だと思う人もあろう。が，落ちついて考えてみると，そういう事をするということは，本質的には，〈時〉に対する，而して〈人間存在〉に対する彼らの認識そのものの浅さ加減を，如実に物語っているのだ，と兼好なら言うのではなかろうか。何しろ彼は，人間心理を見抜き，只今一瞬間の意味をよく洞察しえていたのであるから。すなわち，

> 道を学する人，夕には朝あらん事を思ひ，朝には夕あらんことを思ひて，かさねてねんごろに修せんことを期す。況んや一刹那のうちにおいて，懈怠の心ある事を知らんや。何ぞ，ただ今の一念において，直ちにする事の甚だ難き。（第九二段）[33]

と「段末の自戒の一句」に「千鈞の力」[34] がある名文や，第百八段の，

> 寸陰惜しむ人なし。……刹那覚えずといへども，これを運びて止まざれば，命を終ふる期，忽ちに至る。
>
> されば，道人は，遠く日月を惜しむべからず。ただ今の一念，むなしく過ぐる事を惜しむべし。……一日のうちに，飲食・便利・睡眠・言語・行歩，止む事を得ずして，多くの時を失ふ。そのあまりの暇幾ばくならぬうちに無益の事をなし，無益の事を言ひ，無益の事を思惟して時を移すのみならず，日を消し，月を亙りて，一生を送る，尤も愚かなり。[35]

の如き緊張した表現の中に，みられるように。

まことに，一瞬一瞬過ぎ去ってゆくなかで，只今この瞬間的現在こそ，人間をはじめあらゆる存在にとって，その存在の根柢ではないのか。また最も深い意味においては，瞬永一如（一瞬と永遠とは一如，の意）と言うべきか……。

さて，紙数の関係もあり，この辺で一応筆を置くとして，その前に一言。

最近，若手の外国文学研究者の作品研究論文の一般的傾向について耳にしたことであるが，それら作品論は迫力もなければ深みもないものが意外に多いという。何故，そういう傾向にあるのか。思うに，余りに早い頃から狭い専門にこり固まるからではないだろう

か。かの石橋幸太郎博士も，「始めから間口を狭くしたのでは，奥行きも深くはなりえない。」[36] と明言されているではないか。まさに，急がば回れ。そういえば，島田謹二先生[37]（英文学専攻にして比較文学の大家）も，説いておられた。

> 要するに，いままでの一部の人のやり方のように書物にかたよったり，思索だけを重んじるというのではなく，生きた人生を体得することから，古今東西の文学を解し，味わい，論じていただきたい。
>
> 生きている人間と，多様な自然と，また今日に脈々とつづいている歴史を深く学ぶことによって，学問も研究も，生き生きとし，血のかよったものになるはずである。たとえ今までの考えによる学問からみると未熟でも，生きているなんらかの力でわれわれを動かし，大きな完成に向かう新しい一歩を踏みださせてくれるような学風がほしい。学問上の基礎を十分にもちながら，「詩」を読むような研究があっても，よいのではなかろうか。[38]
>
> （『日本における外国文学』）

そもそも，「文芸とは，ただ技法・表現など表面にあるもので尽きるものではなかろう。もっと裏にある，もっと深い，もっと根元にある人生そのものの悟得や，それへの理解や，それへの悲しみがなくて，どうして文学が論じられようぞ。」[39]……正に至言。

とここまで書いてきて，思う。今日，いかなる分野の研究者にしろ，人間そのものへの深い理解を欠き，人の痛みや悲しみが解せないようでは，彼の研究は時の権力に利用されるだけの技術にはなりえても，到底「学問」と呼ばれるに値するものではない，と言わざるをえまい。このことを端的に，各地の公害が物語っているではないか。

それはそうと，文学を研究するには実際いろんな方法があるだろう。が，いずれにせよ，文学研究で一人前になるには，理工系などの科学技術分野とは異なり，非常に長い歳月に亙る努力（広く而も深く勉強すること）を必要とするものなのだ，という事をよくよく銘記しておくべきなのであろう。その間，根底に，〈存在〉への深い心と現状変革への強靭な精神とを蔵して……。　　（つづく）

注

1）「東亜の光」（大正4年6月発行）に発表されたもの。
2）日本文学研究資料刊行会『方丈記・徒然草』（有精堂，昭54.），155頁。
3）同，同頁。
4）同，156頁。
5）同，同頁。
6）「国語解釈」（昭和12年3月号）に発表されたもの。
7）日本文学研究資料刊行会『方丈記・徒然草』，137頁。

8) 同，同頁。
9) 同，139頁。
10) 同，141頁。以下〈「つれづれ草のつれづれ」を読んで〉と題する論文で，「国語解釈」(昭和13年5月・6月号）に発表されたもの。
11) 同，145頁。
12) 同，146頁。
13) 同，同頁。
14) 同，147頁。
15) 安良岡康作『徒然草全注釈』上巻（角川書店，昭52.)，19頁。
16) 有精堂編『徒然草講座』第一巻（有精堂，昭49.)，153〜154頁。
17) 伊藤博之編『中世の隠者文学』(学生社，昭51.)，160〜174頁。
18) 日本文学研究資料刊行会『方丈記・徒然草』，146頁。
19) 同，148頁。
20) 同，156頁。
21) 富倉徳次郎・貴志正造編『方丈記・徒然草』(角川書店，昭52.)，125頁。
22) 有精堂編『徒然草講座』第一巻，15〜17頁。
23) 同，17〜19頁。
24) 同，19〜20頁。
25) 同，21〜23頁。
26) 同，24頁。
27) 西尾実『方丈記・徒然草』(日本古典文学大系30)（岩波書店，1979.)，90頁。
28) 同，205頁。
29) 同，128〜129頁。
30) 同，179〜180頁。
31) 井手恒雄『徒然草通説批判』(世界書院，1969.)，96〜97頁。
32) 橘純一『評註徒然草新講』(武蔵野書院，昭53.)，244頁。
33) 西尾『方丈記・徒然草』，164〜165頁。
34) 橘『評註徒然草新講』，208頁。
35) 西尾『方丈記・徒然草』，177〜178頁。
36) 石橋幸太郎『書斎随想』(吾妻書房，昭43.)，45頁。
37) 1953年，東京大学大学院に，比較文学・比較文化課程を創設，初代主任教授として，後進を育てる。1974年に東京大学から文学博士号を受ける。
38) 島田謹二『日本における外国文学』上巻（朝日新聞社，昭50.)，30頁。
39) 島田『日本における外国文学』下巻，595頁。

A Study of *Tsurezuregusa*. (I)

Saburo NAMBA

Department of General Education,
Okayama University of Science
Ridai-cho, Okayama 700, Japan

(Received September 21, 1979)

Résumé

This essay is intended to bring light on what the opening paragraph of *Tsurezuregusa* means, and to give an account of the reason why Kenkô, the author of the classic, came to the decisions to enter the priesthood and to sequester himself from the world.

In bringing to light what the opening paragraph of it means, the present writer emphasizes the necessity of considering the paragraph from the historical context and in the whole of *Tsurezuregusa*, and reading connotations between the lines, mentioning a few opinions by some Japanese scholors of what the paragraph means.

In giving an account of the reason why Kenkô came to the decisions to enter the priesthood and to live the life of a recluse, the inevitability or necessity for him to have done so is explained, with emphasis on his personality and his view of life shown in *Tsurezuregusa*, mentioning the latest opinions of his personal history by some scholors.